

---

# 有り得ない強敵

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

有り得ない強敵

### 【Nコード】

N7251R

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

昭和のゲームセンター。十島真一郎があるゲームで遭遇したとんでもない敵とは。昔のアーケードゲームにはこんな敵が本当にいました。Smile Japanの作品です。年配の方に読んで頂ければと思います。

## 第一章

有り得ない強敵

昭和の終わり頃の話である。この頃ゲームセンターはアーケードゲームがだ。今より遥かに栄えていた。その中には多くの少年がいた。

その少年の一人十島眞一郎はゲームが趣味だ。それもアーケードゲームである。

これまで数多くのゲームをワンコインでクリアしてきた。とにかくどんなゲームでもクリアしてみせる、彼の誇りであった。

その彼がだ。今やっているゲームはだ。『忍者くん』というゲームであった。

赤いやたら小さい忍者を操って妖怪達を倒していく。彼のその天才と言っても過言ではないゲームの腕はこのゲームにおいても遺憾なく発揮された。山や城を舞台にしたステージを所狭しと暴れ回り敵キャラ達を翻弄する様にして倒していく。ステージを次々とクリアしていく。

「何だよ、大したゲームじゃないな」

彼はプレイしながらこう呟いた。周りには多くの席があり彼と同じプレイヤー達がプレイしている。その音楽や効果音が暗い店の中に響いている。

その中でだ。彼は呟くのだった。

「黒子、達磨、歌舞伎、雷、獅子舞、骸骨、蜥蜴、どれも出て来てすぐに倒すか頭を踏んで気絶させてから倒せば問題ないな。大したゲームじゃないな」

こう言っただ。敵を倒していく。まさに快進撃だった。

だが、その中でだ。画面にだ。

鎧兜に身を包んだ敵が出て来た。眞一郎はその敵を見てだ。

他の敵と同じ様にすぐに近付き攻撃を仕掛けた。ところが。

攻撃を受けてもだ。死なないのだ。平気な顔をしてそこに立っている。

そして攻撃はだ。ビームの如き速さの弓矢だった。

「な、何だこいつ!？」

彼は慌てて攻撃をかわしながら言った。

「攻撃受けても死なないのかよ。何なんだよ」

とりあえずだ。頭を踏んだ。それで気絶させて何とか倒した。一人だけなので何とかなった。しかしだ。――

## 第二章

「何だよこいつ。気絶させないと倒せないのかよ」

とんでもない奴がいると思った。だが一体だけなら何とかなると思った。しかしだ。

何と今度は雑魚として出て来た。何人もいる。こうなってはたまたものではなかった。彼は鎧達の前に敗れた。

彼にとっては忌まわしい敗北だった。敵はあまりにも強かったのだ。

「何だつてんだよ、あいつは」

その強さの前に唾然だった。だが何度もプレイして苦労してだ。鎧を倒していった。しかしその強さは記憶から離れなかった。

「あんな強い敵ははじめてだ」

心から思った。もう二度と相手にしたくなかった。

そう思ってから数年後。今度はこのゲームの続編『阿修羅の章』をプレイした。このゲームでも快進撃だった。

進撃を続けながら。彼は思った。

「もうあいつは出ないよな」

それは祈りだった。絶対に出ないでくれと思っていた。しかしステージを勧めていくうちに。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何とだ。前作以上の数で彼の前に出た。彼はここでも負けてしまった。彼にとつてはだ。実に忌々しい相手であった。強過ぎた。こちらの攻撃は効かずビームの如き弓矢を放つ。そうして今回もあえなく倒されてしまった。

しかしそれにめげず彼はプレイをしてだ。遂に鎧達を何とか以前と同じ様に気絶させて倒していきクリアした。しかしその感想はという。

「ラスボスより鎧の方がずっと強かったな」

こうした感想だった。とにかくだ。鎧は強かった。他のゲームでは有り得ない強さだった。その強さは彼の心から消えてなくならなかった。他のどんなゲームをしてもである。

それから年月が経ち彼は結婚して子供ができてだ。自分の家でゲームをしている息子にだ。こんなことを言うのだった。

「お父さんが昔していたゲームにはな」

その鎧のことを話す。そのあまりもの、えげつないまでの強さだ。彼にとっては我が子に話しても遜色のないものだった。そして我が子もだ。そのあまりもの強さを聞きだ。こう言うのだった。

「昔のゲームの敵って酷かったんだね」

そんな時代の話である。今となってはだ。懐かしい時代の話である。

有り得ない強敵

完

2011・3・18

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7251r/>

---

有り得ない強敵

2011年6月1日15時37分発行